

尾張元興寺跡第13次発掘調査報告書



2 0 0 9

名古屋市教育委員会

例 言

- 1、本書は、名古屋市中区正木4丁目1007番の一部で実施した尾張元興寺跡第13次発掘調査の報告書である。
- 2、調査は倉庫建築工事に伴って実施し、対象面積は65㎡、期間は平成20年4月7日から同年5月2日である。
- 3、調査に関わる調整事務は、名古屋市教育委員会文化財保護室学芸員伊藤正人が担当し、発掘調査を実施した名古屋市見晴台考古資料館の担当者は、学芸員竹内宇哲、市澤泰峰である。本書は、同館学芸員服部哲也、伊藤厚史、村木誠、瀬瀬茂の協力を得て市澤が執筆した。
- 4、調査の記録や遺物の整理作業は、調査担当者のほか、伊東亜紀、江田仁実、小川敦子、加賀貴巳子、角脇由香梨、佐々木佳子、鈴木智里、蜂須賀敦子、樋上佐知子、山本雅代、米倉由佳が行った。
- 5、本書で示す方位、座標は国土座標第Ⅶ系（世界測地系）、水準値は東京湾平均海水面（T.P.）である。
- 6、調査の記録、出土遺物等は名古屋市見晴台考古資料館が保管している。
- 7、発掘調査にあたり、下記の方々にご協力を賜りました。記して感謝申し上げます。

株式会社杉本組

目 次

I 尾張元興寺跡の位置	1	V 調査の成果	4
II 周辺の遺跡と歴史的環境	1	i 基本層序	
III 尾張元興寺跡の概要と既往の調査	2	ii 遺構と遺物	
IV 調査に至る経緯と調査の経過	3	VI 小結	14
i 調査に至る経緯			
ii 調査の経過			

報告書抄録は裏表紙に掲載

表紙写真：調査地点付近より佐屋街道を西に望む

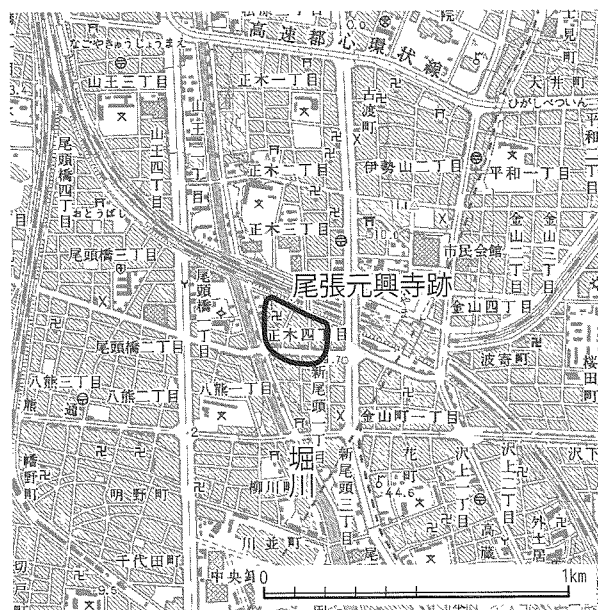
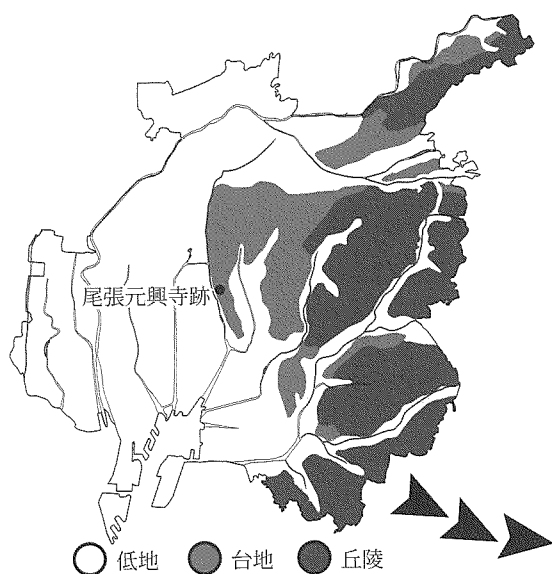


図1 尾張元興寺跡の位置

I 尾張元興寺跡の位置

現在の名古屋市域の中心部は南北に長い半島状の、熱田層からなる台地上に位置している。この熱田台地は、北は名古屋城付近から南は熱田神宮付近までの南北15km程度、東西は広いところで3 km程度の細長い台地である。熱田台地の西側は波蝕されており、東側から西側に向かって緩やかに傾斜をしている。また、北側から南側に向かって傾斜している。この熱田台地の西側の縁辺には海岸線が近くまで来ていた時期があったと考えられており、近世前半においても熱田神宮の門前は海に面していたようである。

尾張元興寺跡はこの熱田台地の中ほど西側に位置しており、遺跡範囲は東西約200m、南北約180mで、標高は7～10mほどである。遺跡のすぐ西側は堀川に向かって急角度で傾斜し、遺跡の中央部には東西に近世の佐屋街道が走っている。遺跡の北側には正木町遺跡や伊勢山中学校遺跡が分布しているが、尾張元興寺跡との間には JR 線や名鉄線が通り金山総合駅を挟んで谷状に分断されている。しかし、これは明治時代に JR 東海道本線を敷設するための工事によって切り通されたものであり、もともとは北側の台地とつながっていた。東側と南側へは比較的平坦な面が続いており、東古渡町遺跡や金山北遺跡、高蔵遺跡などが分布している。

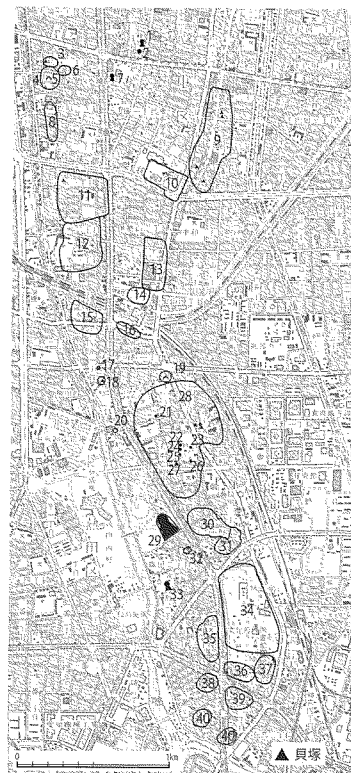
II 周辺の遺跡と歴史的環境

尾張元興寺跡の南側には熱田台地に沿って、1 km ほどのところに高蔵遺跡が位置し、その他にも東海地方で最大の前方後円墳である断夫山古墳や白鳥古墳、熱田神宮などが位置している。

北側には正木町遺跡や伊勢山中学校遺跡が位置する。これまでの調査で両遺跡には5世紀に鉄鋌や韓式系土器、初期須恵器を持つ集落があり、古墳時代ないしは奈良時代とされる総柱の大型掘立柱建物址は、愛智郡の役所に関係するものと考えられている。また、「黒見田」の刻書のあるものや羊形硯片などの古代の須恵器の出土量も多い遺跡である。

東側には金山北遺跡や東古渡町遺跡がある。金山北遺跡では弥生時代には方形周溝墓がつくられるが、古墳時代以降、住居址や建物址が多く確認されている。東古渡町遺跡においては古墳時代まで墓域であったようであり、金山北遺跡にやや遅れて古代以降に住居址などが確認されるようになる。

尾張元興寺跡でも古墳時代の住居址や溝が確認をされており、北側の正木町遺跡や伊勢山中学校遺跡、東側の金山



- | | |
|-------------|--------------|
| 1 那古野山古墳 | 21 花ノ木古墳 |
| 2 浅間神社古墳 | 22 高蔵1号墳 |
| 3 岩井通貝塚 | 23 高蔵2号墳 |
| 4 旅籠町遺跡 | 24 高蔵3号墳 |
| 5 日置城跡 | 25 高蔵4号墳 |
| 6 西脇町遺跡 | 26 高蔵5号墳 |
| 7 大須二子山古墳 | 27 高蔵6号墳 |
| 8 松原遺跡 | 28 高蔵遺跡 |
| 9 富士見町遺跡 | 29 断夫山古墳 |
| 10 古渡城跡 | 30 玉ノ井遺跡 |
| 11 正木町遺跡 | 31 森後町遺跡 |
| 12 伊勢山中学校遺跡 | 32 白鳥古墳 |
| 13 古沢町遺跡 | 33 旗屋遺跡 |
| 14 金山北遺跡 | 34 熱田神宮内遺跡 |
| 15 尾張元興寺跡 | 35 熱田-C遺跡 |
| 16 東古渡町遺跡 | 36 熱田神宮南門前貝塚 |
| 17 住吉神社東遺跡 | 37 新宮坂貝塚 |
| 18 沢観音堂貝塚 | 38 熱田-D遺跡 |
| 19 熱田村城 | 39 熱田-B遺跡 |
| 20 瓶屋橋遺跡 | 40 御浜御殿跡 |

図2 尾張元興寺跡周辺の遺跡 (S = 1 / 50000)

北遺跡や東古渡町遺跡、古沢町遺跡などを含めた中で遺構などの変化を見ていくことが必要であろう。

Ⅲ 尾張元興寺跡の概要と既往の調査

考古学的な成果からは尾張元興寺の創建は7世紀中頃と考えられている。文献史料では『日本紀略』の元慶八年(884)八月二十六日甲寅の条に「勅令して尾張国愛智郡定額願興寺を国分金光明寺となす。本金光明寺災火焼損縁なり」とあり、この中の「尾張国愛智郡定額願興寺」が当寺院址である尾張元興寺であると考えられている。創建については、『日本霊異記』の説話に登場する道場法師が、国に帰って建てたとする言い伝えが残されている。

「願興寺」は10世紀頃になると衰退し、13世紀前半頃に再興されるようであるが、その後再び荒廃しているようである。現在、遺跡範囲内には泰雲寺と元興寺という二つの寺院が存在する。泰雲寺は寛文九年(1669)に立田村から移転された瑞光山大応寺が泰雲寺となったものであり、元興寺は享保三年(1718)に知恩院の末寺国豊山元興寺として建てられたもので、近世以前の記録に残されている寺院とは直接につながるものではないと考えられる。一方、1.5kmほど南西の中川区牛立町に位置する願興寺は当地から戦国期に移転したという沿革を持つ。

表1 尾張元興寺跡における既往の調査成果

公領地点	遺物	縄文	弥生	古墳	古代
1次調査	遺物			須恵器壺	瓦
2次調査	遺物			須恵器、土師器	瓦、須恵器、土師器、灰軸陶器
3次調査	遺物			SB01(周溝・胎床)、SD01(瓦含ます)	SK01(瓦だまり)
4次調査	遺物			須恵器(7世紀前半代、H50型式)、土師器、土埴	瓦、鷲尾、須恵器、土師器、灰軸陶器(K-14号窯式~K-90号窯式(10世紀前葉))、多口瓶(K-14号窯式)
5次調査	遺物			須恵器、土師器	瓦、須恵器、土師器、灰軸陶器
6次調査	遺物			須恵器、土師器、円筒埴輪	SK01・02・04・05(瓦だまり)、須恵器、土師器を含む
7次調査	遺物			SB01-06	瓦、須恵器、土師器
8次調査	遺物		弥生土器	土師器、須恵器	瓦、須恵器、土師器、灰軸陶器
9次調査	遺物	縄文土器	弥生土器	SDX2(浅い)、SD03、小土坑	SK01(構造窯か)、小土坑
10次調査	遺物	縄文土器	弥生土器	須恵器、土師器、埴輪	瓦、須恵器、土師器
11次調査	遺構				大規模な瓦だまり中心、調査区北東部に広がるSK11(古代末頃の埋没か。瓦片大きく、2次的移動少ないか。下層には古代瓦がほとんど含まれない。古代の須恵器・土師器)SK14(瓦壘築土坑。瓦だまりの中では最も新しい掘削。坑底には古代瓦が充填。瓦片小さく2次的移動の可能性。宝相華紋軒丸瓦(尾張元興寺軒丸K)6点。古代の須恵器・土師器僅か)SK17・21(SK14に切られる。下層は古代瓦まばら。SK21の最下層は瓦含まない。土器類総量少ない。須恵器・古代の灰軸陶器。古代末頃の埋没)水種(SK17遺構底の地山に食い込む。銅製品の小破片)
12次調査	遺物	晩期深鉢1点	弥生土器僅か	土師器、移動式カマド	須恵器、灰軸陶器、瓦
バスコ調査	遺構			SB01(藍溝、炉跡、主柱穴(P4・48・66・150)、約4.4m四方)SK10、SK11、P8、P42、P82、P22、P52、P140、P168、貝層1~3	SK01、SK02、SK08、SK09(調査区北側に集中)
	遺物	縄文土器(貝層1、SK09)	弥生土器(SK09)	須恵器、土師器、韓式系土器、石製模造品の曲玉	瓦、灰軸陶器
	遺物			SX01(溝状遺構、下層は瓦を含まない)	SX03
	遺物		弥生土器	須恵器、土師器	瓦
	遺構			SB03(5世紀後半、H111号窯期、主柱穴P70、P116)	SK21、SK23、SK7、SK30、SB01、SB02、SX01、SB04、SB06、SK29
	遺物		弥生土器	須恵器、土師器、鉄鏡	瓦、須恵器、土師器、灰軸陶器、須恵器円面鏡
	遺構			SK46(SK47)(方形周溝墓となる可能性)、(SK48、SK50)	
	遺物			ハレススタイル土器(Ⅶ様式初め)	瓦、須恵器、灰軸陶器
	遺構				
	遺物	縄文土器	弥生土器	初期須恵器(5世紀)、須恵器、土師器	瓦、土師器、須恵器・土管(7世紀後半)、灰軸陶器(9世紀頃、浄飯片)
	遺構			SD01(古墳時代中期)SB02(6世紀後半~7世紀前半の遺物、主柱穴P108・107・75・25、下層にSB02以前のビット1基、溝2条、土坑2基)SB03(3世紀後半か、SK10は貯蔵穴の可能性、埴土)SB04(4~5世紀か、周溝、主柱穴P89・61・84・83、埴土)SB05(周溝、主柱穴P50・118・78・81、埴土、SK09は貯蔵穴の可能性)SB06(周溝、時期不明)SB07(主柱穴P27・54、4~5世紀か)SK13(混貝層)	
	遺物		弥生土器	須恵器、土師器、白玉	瓦、須恵器、土師器

尾張元興寺跡では本調査の前までに14ヶ所で調査がおこなわれている。各調査の詳細については表1にまとめる。それらの概略をまとめると、寺院が建立されたと考えられる奈良時代以前の古墳時代の遺構として、2、5、8、10次調査とパスコによる調査で住居址や2、6、9次調査で比較的規模の大きな溝を確認している。溝は瓦を含まず、寺院が建立される直前に一気に埋められているようである。

伽藍に関わる遺構は現在まで確認されていない。しかし、各調査で大量の古代の瓦や、本調査地点のすぐ西側に位置する7次調査では水煙の一部が地山に突き刺さった状況で出土している。

また、近世には元興寺や泰雲寺の境内に関わると考えられる遺構や遺物も多く確認されている。特に、8次調査では埋葬施設と考えられる遺構を多く確認している。

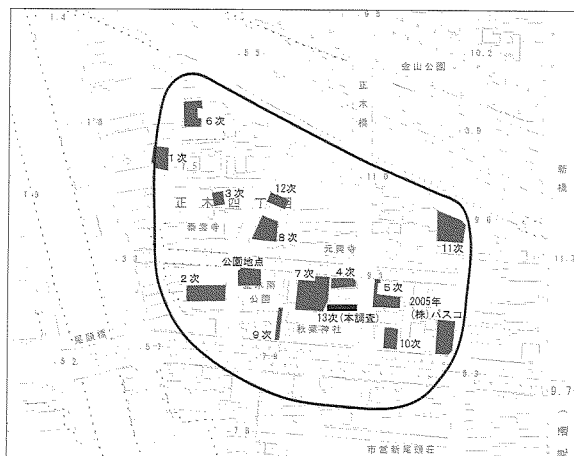


図3 既往の調査地点 (S=1/5000)

中世	近世	近代～
	SD01 (瓦、須恵器、土師器、灰釉陶器、山茶碗近世陶器) SK22等	
山茶碗、中世陶器 SK05	近世陶器	
常滑製の小瓶、山茶碗小皿		
	掘り込み、瓦穴	
	棧瓦	
	SK03	防空壕
SD02、瓦だまり (古代瓦は2次的な廃棄)		
陶磁器		
SD01、SX02 (瓦だまり)、小土坑		
山茶碗、古瀬戸		
SK34 (下位部分がオーバーハング。貯蔵穴の可能性。中世～近世初頭) P108 (下位部分がオーバーハング。SK34同様貯蔵穴の可能性。時期も同時期) SK41・42 (北側に降り口の階段。中世～近世の貯蔵穴) SK26 (土塋墓。西面北頭位の屈葬。直葬、副葬品なし。埋土中に中世山茶碗。中世末～近世前半。1体以外の骨の混入)	SK01・03・09 (大土坑群。江戸後期に掘削された穴蔵か SK01・03は幕末頃埋没 SK09は太平洋戦争後埋没 建物跡 (川原石を礎石。江戸後期以降) 堀および道 (明治17年の地籍図に一致する道と堀の柱列)	
中世陶器	陶器・磁器・陶胎染付 (椀・皿・德利・水滴・灯火具・摺鉢)、煙管	焼夷弾
SK03	埋葬施設 A 類 (P1～3、座葬で方形棺か19世紀代) 埋葬施設 B 類 (P93・108・165～167・176～178・184、仰臥屈葬で長方形棺か) 埋葬施設 C 類 (P162・185、B 類の小規模なものか) SK04、SK06、SD01、SD02	
山茶碗、施釉陶器	人骨、寛永通宝、数珠、鉄釘、土人形、灰釉小瓶、鉄絵草文碗、ろくろ成形土師皿、瓦、欄羽口、火打ち石、近世陶磁器	
山茶碗	SX02、P09 (常滑産大甕埋没)	
SK15 (地下式壙)	SK1・4・5・6・8・9・10・11・12・13・16・17・18・19・22・24・25・26・27・28 (北西部土坑群は廃棄土坑、南東部土坑群は「地下室」あるいは「穴蔵」か)、SE1	防空壕
中世陶器、山茶碗、青磁、土製羽釜、土鍋	近世陶磁器、火打ち石	陶製代用品鉢
SX01 (下部がオーバーハング、14世紀代に埋没か、地下式壙か) SD01 (中央部～南部は15世紀代の埋没か、北部は19世紀代の埋没か)	SK01、SK07 (18世紀後半～19世紀) SK15 (19世紀代か) SK18 (18世紀後半～19世紀) SK20 (18世紀後半か) SK21 (井戸、17世紀後半～19世紀か) SK22、SK23、SK37、SK39 (地下式壙か) SX03 (17世紀後半頃か、地下式壙か) 東半区方形土坑	SK38 (防空壕)
山茶碗、古瀬戸、青磁、土師器煮沸具、四耳壺、五輪塔	近世陶磁器、欄羽口	
	SK01、SK02、SK03、SK04 (地下室か)、SK05、SD01、SD02、SD03、SD07、SD08、SD09、SD10、SD11	SX01、SD04
中世陶器		近代陶磁器、瓦、焼夷弾
SD08 SK27 (10次調査SK15と同様の性格の可能性)	SK29 SD02 (弥生土器含む)	
山茶碗、古瀬戸、摺鉢	近世陶磁器	

IV 調査に至る経緯と調査の経過

i 調査に至る経緯

調査地周辺は尾張元興寺跡として既知の埋蔵文化財包蔵地として周知されている。周辺の調査においても瓦や水煙の一部など寺院に関わる遺物を中心に成果が積み上げられてきている。そのような状況の中で本調査地点において倉庫建設工事の届け出が市教育委員

会文化財保護室に提出された。文化財保護室において試掘調査をおこなった結果、遺構の残存が確認されたため、事前に調査を実施し、記録をおこなうこととなった。本調査地点は水煙の一部が見つかった第7次調査地点のすぐ東側にあたり、塔に関連のある遺構や遺物の確認も期待された。

ii 調査の経過

調査地点は2m×30mほどの東西に細長い敷地であり、排土置場の関係から西区・中区・東区の3回に分けて調査をおこなった。西区から着手し、表土掘削を始めると包含層はほとんど見られず、すぐに地山である熱田層の上面を検出した。調査区の南部は既存のビル建設工事の際に攪乱を受けている部分が多く見られた。調査は2008年4月7日に着手し、同年5月2日までにすべての作業を完了し撤収作業をおこなった。

調査日誌抄

4月7日(月)晴、調査開始、西区の表土機械掘削	4月22日(火)晴、東区、表土機械掘削
4月8日(火)晴、西区、表土機械掘削	4月23日(水)晴、東区、包含層掘削
4月9日(水)晴、西区、包含層掘削	4月25日(金)晴、東区、遺構検出、遺構仕上げ
4月11日(金)晴、西区、遺構検出	4月28日(月)晴、東区、遺構仕上げ
4月14日(月)晴、西区、遺構仕上げ、図面作成	4月29日(火)晴、東区、遺構仕上げ
4月15日(火)晴、西区、遺構仕上げ、清掃、全景写真撮影	4月30日(水)晴、東区、遺構仕上げ、清掃、全景写真撮影
4月16日(水)晴、中央区、遺構仕上げ	5月1日(木)晴、東区、図面作成、個別遺構写真撮影
4月21日(月)晴、中央区、遺構仕上げ、清掃、全景写真撮影	

V 調査の成果

調査地点付近は明治時代の地籍図によれば、国豊山元興寺の敷地と道路を挟んですぐ東側に位置し、宅地として利用されていたようである。調査開始前は奥にプレハブ状の資材庫があり、道路に近い間口側は駐車場として使われていた。地表面は舗装がされており、それらが取り除かれた状態から調査に着手した。

i 基本層序

本調査では隣地との関係上壁面に矢板を打ちながら掘削をおこなったため、壁面の観察ができたのは東壁のみであった。東壁付近の基本的な堆積は、舗装とバラスの下に近代以降の整地層と考えられる濃茶褐色の砂質シルト層(1層)が、その下にはSK13としたやはり近代以降の整地層と考えられる褐色のシルト質粘土層(2層)が堆積をし、その下位で地山である熱田層を検出した。2層上面からは近代以降の掘り込みであるSK10・11などの土坑が見られた。

調査区全体では、このように近代以降の整地層ですら検出される部分は少なく、大部分は30cmほどのガラを含む

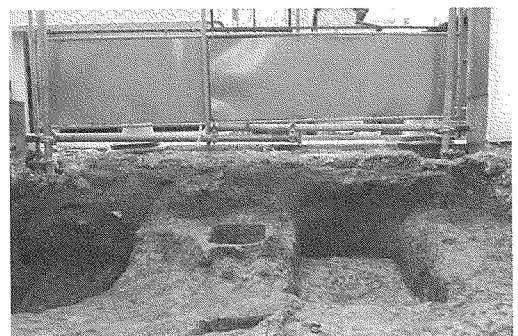


図4 調査区東壁(西から)

表土層を取り除くと、包含層や整地層は見られず、地山上面を検出するような状況であった。

ii 遺構と遺物

本調査地点では近代以降の攪乱が多く、包含層も残されていなかった。遺構の検出は表土を除去した後の地山面で行ったが、特に西端では遺構がはっきりせず、染込みとの判別が困難であった。遺構として検出し掘削を行ったが、遺物が出土していない遺構もある。遺構の時期としては古代瓦からなる瓦だまりや近世の遺物を含む遺構がみられた。また、古代以前に関しては弥生末から古墳時代初頭にかけての土器など(37、39)は出土したが、この時期に属する遺構は確認されなかった。古代に属すると考えられる遺構は瓦だまりのみである。瓦だまりは調査区中央付近のSK1と東よりのSK24・SK27を検出した。

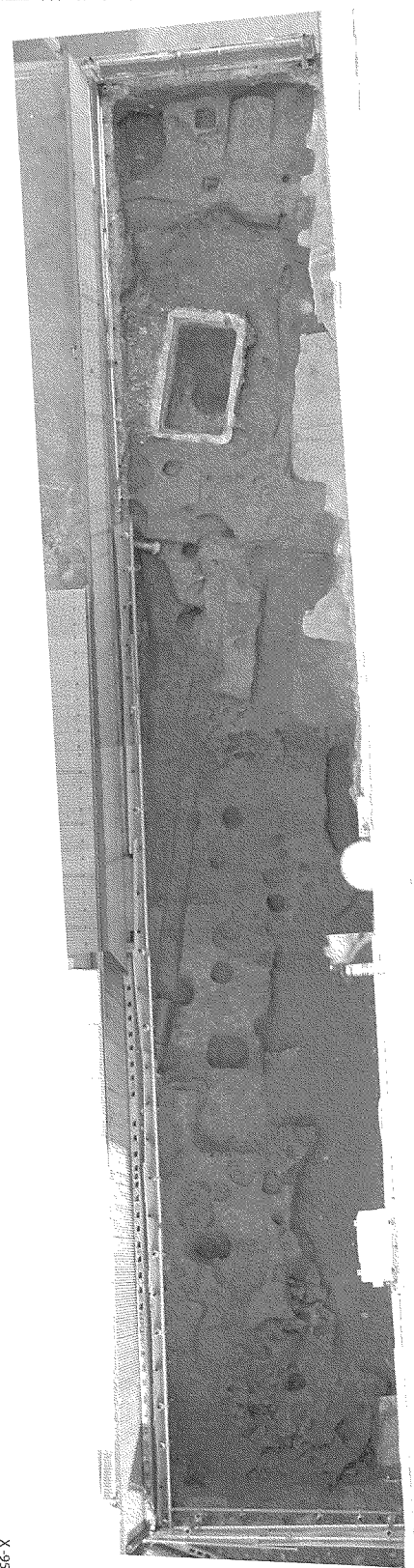
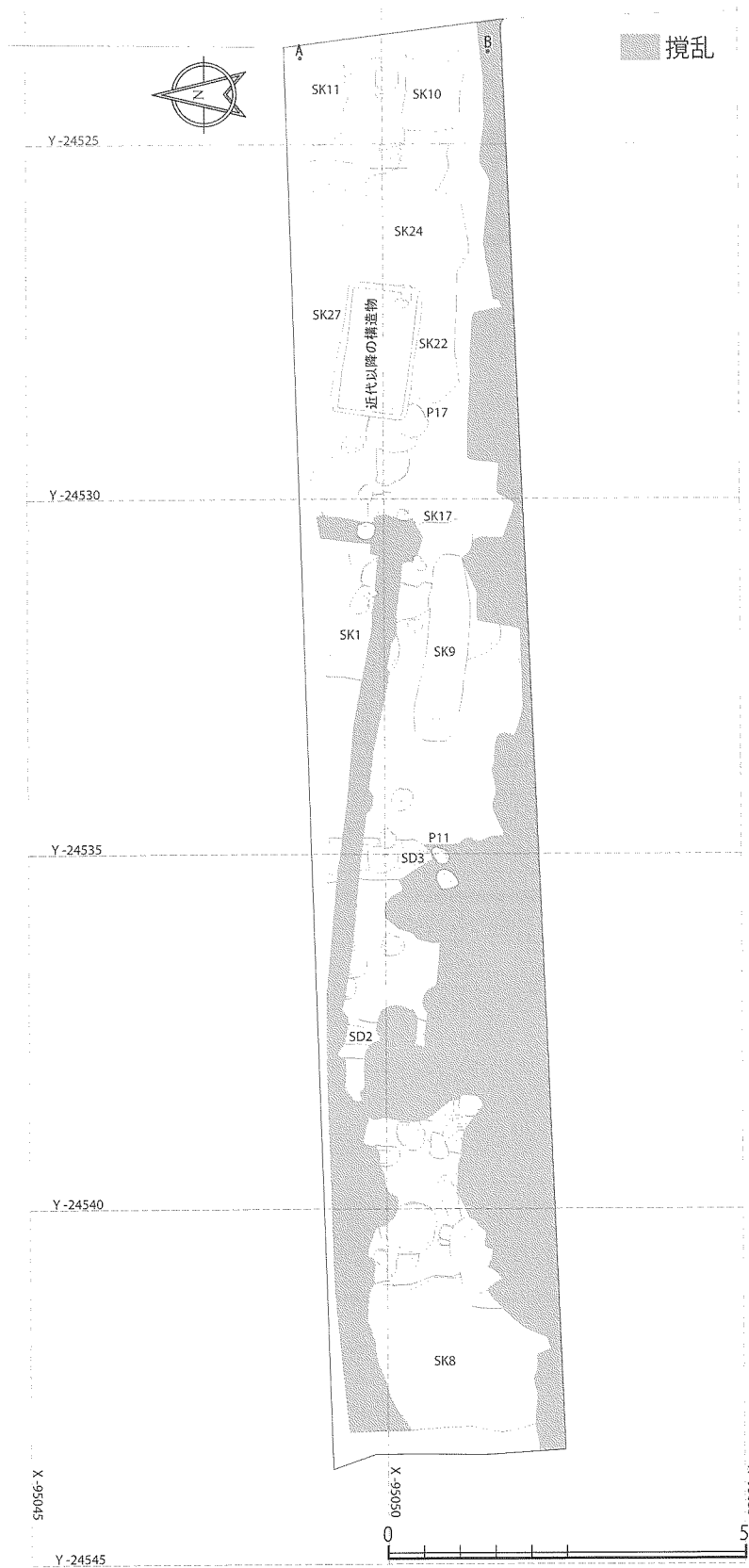
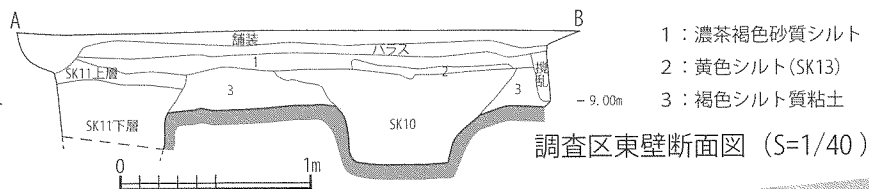
SK1は最上層で近世以降の遺物を含むが、下層は古代瓦を中心とした古代の遺物のみが出土する遺構である。遺物としては瓦が大半を占め、その他の遺物はほとんどみられない。SK1から出土した瓦の中には29や33のように凸面に横方向のケズリ調整を施されたものがある。

SK24とSK27は別遺構名を付しているが、同一遺構である。また、すぐ脇のSK22も主体となる遺物は古代瓦であるが、少量の近世以降の陶磁器を含む。これは瓦だまりであるSK22を後世に掘り抜いて、その後時間をほとんどおかず再度埋め戻されたためであると考えられる。中央辺りを掘り抜いて近代以降の構造物がつくられている。SK24・SK27ともに出土遺物は瓦が大半を占めるが、須恵器などの遺物もごく少量含まれる。SK24からは軒平瓦1点、軒丸瓦2点が出土している。軒平瓦の瓦当文様は簾状押し挽き五重弧紋である。軒丸瓦に関してはどちらも文様部分が剥離しており不明であるが、外縁は重圏を巡らせ広くなっており、尾張元興寺跡で出土する山田寺式の瓦であると考えられる。4、5はどちらも器種不明の遺物である。4は燻しはないが、燻しのない瓦と同じような焼きである。5は燻しが残っており瓦質の遺物である。SK24から出土した瓦には凸面に横方向のケズリがなされたもの(6、11、14、17、21、22、27)やタタキをナデ消したもの(7、8、9)、凹面をナデ調整したもの(8、16、17、19、21)がみられる。

その他の多くの遺構は古代瓦を含むものの近世以降の遺物も出土しており、全体の遺構の時期としては近世以降のものが多い。SK9は第10小期の瀬戸美濃製品を含む遺構であり、佐屋街道沿いの町屋か泰雲寺や元興寺に関わる遺物であると考えられる。

48、49、50は用途不明の棒状の遺物である。図示した以外にも同様の遺物が端部で8点ほど出土している。接合し復元できた中で最大のもは50であり、全長が21.3cm以上である。断面は一辺3.5~4cmの方形で四隅は面取がなされ、どれも被熱をしている。瓦だまりにはみられず、古代瓦を含む近世以降の遺構から出土していることから近世以降の遺物の可能性が高い。用途は不明であるが、被熱していることから窯道具の可能性も考えられる。

SK24、SK27を掘り抜く近代以降の構造物は、枠をコンクリートで作りその内側を漆喰状のもので補強をしている。南東隅付近には縦方向の円形の窪みがあり、底部分は受け状につくられている。当初防空壕かと考えたが、このような作りの防空壕は例がなく内部の作りも非常に丁寧なことから、防空壕以外の用途が想定される。



調査区遺構平面図 (S=1/100)
 調査区全景写真

図5 調査区遺構平面図 (S=1/100) 調査区全景写真 調査区東壁断面図 (S=1/40)

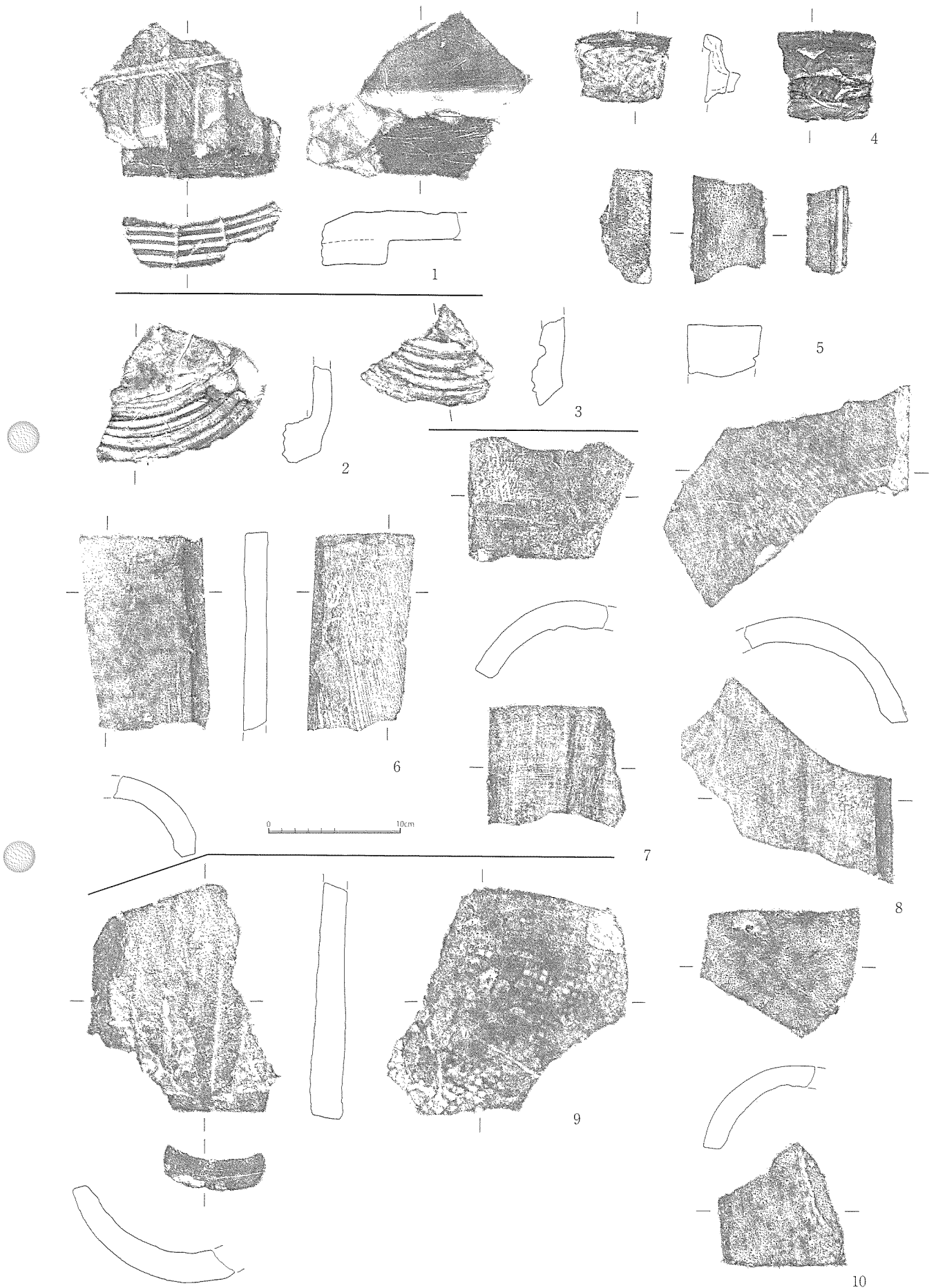


图6 出土遺物実測図1

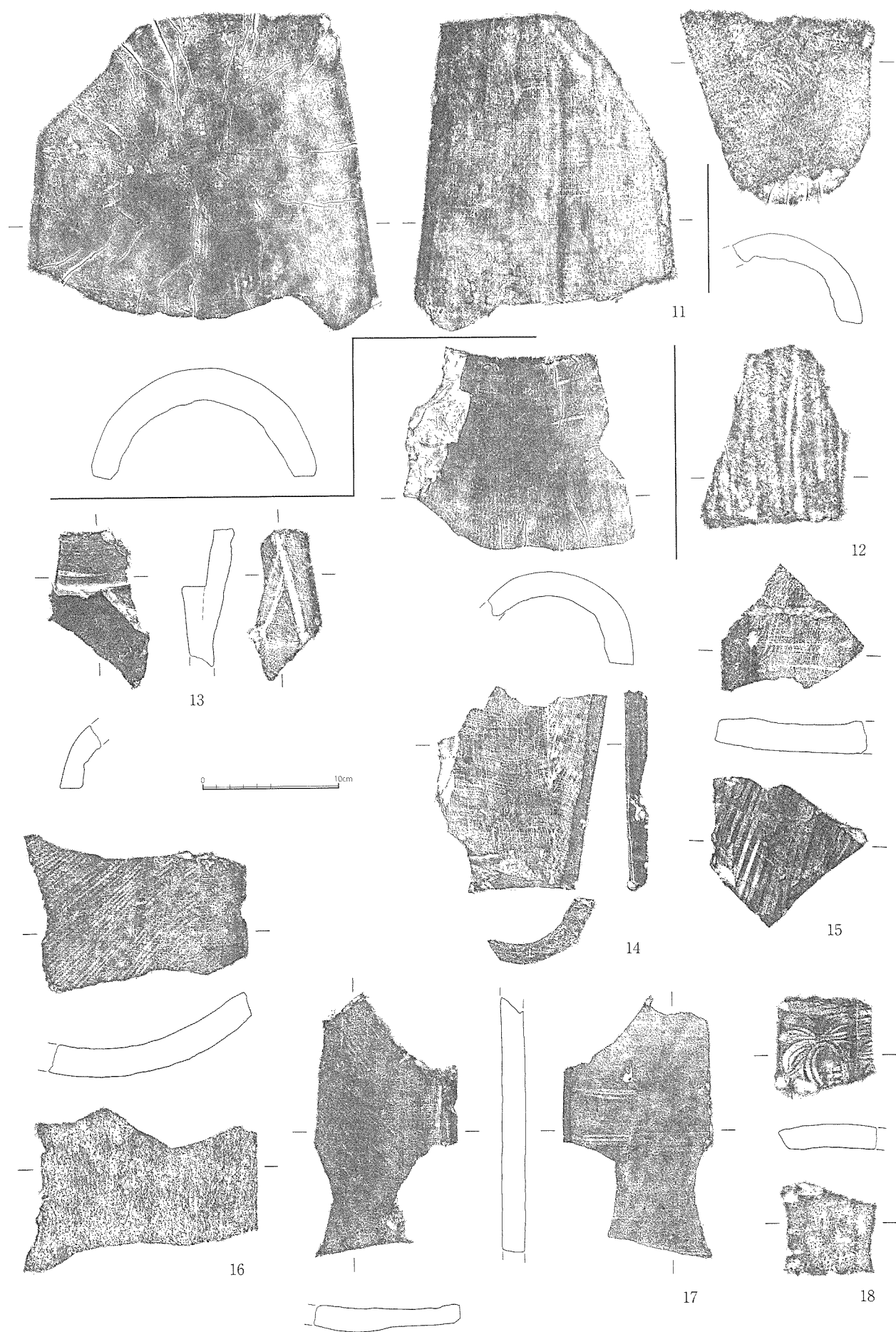


图7 出土遺物実測図2

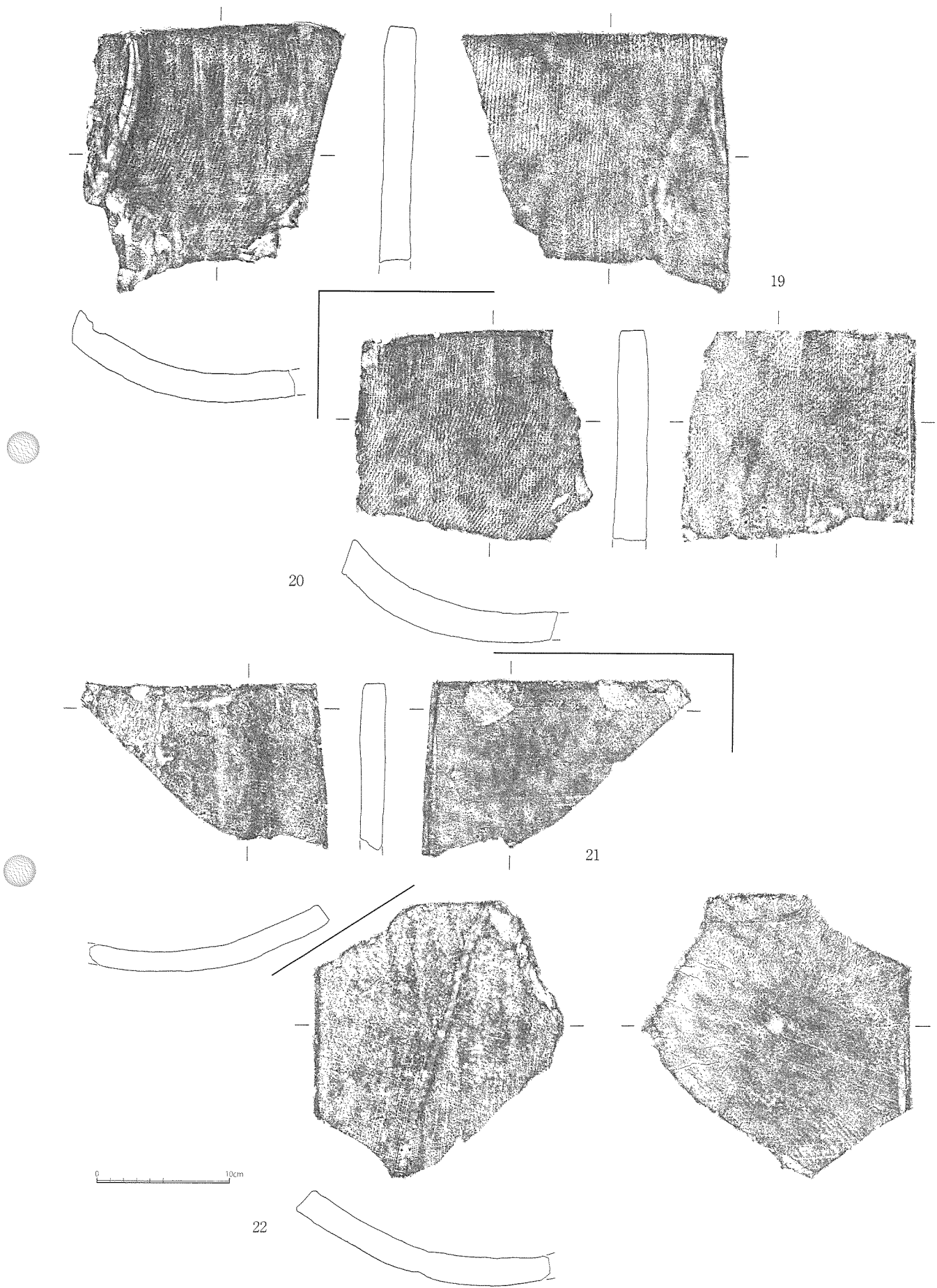


图8 出土遺物実測図3

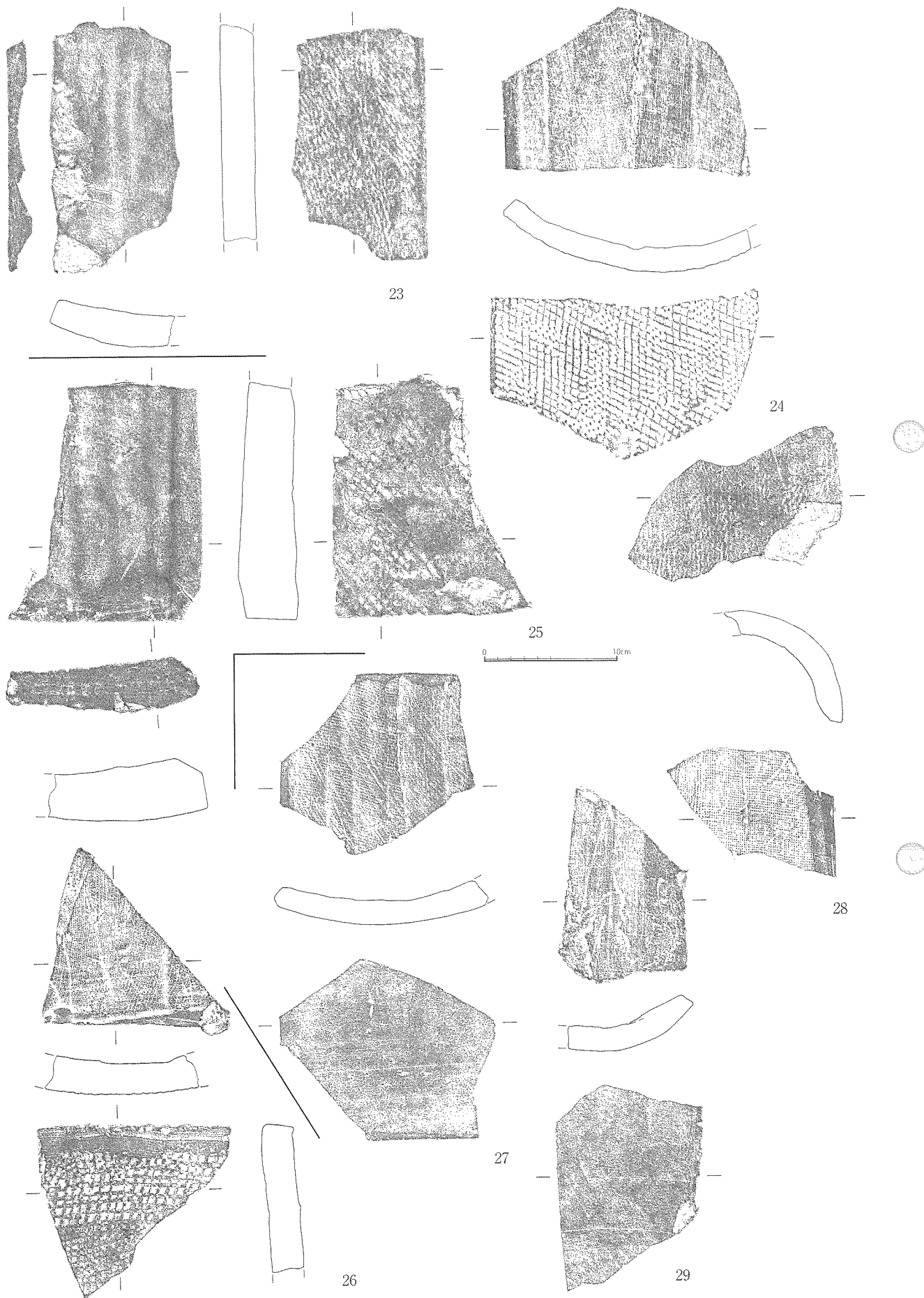


图9 出土遺物実測図4

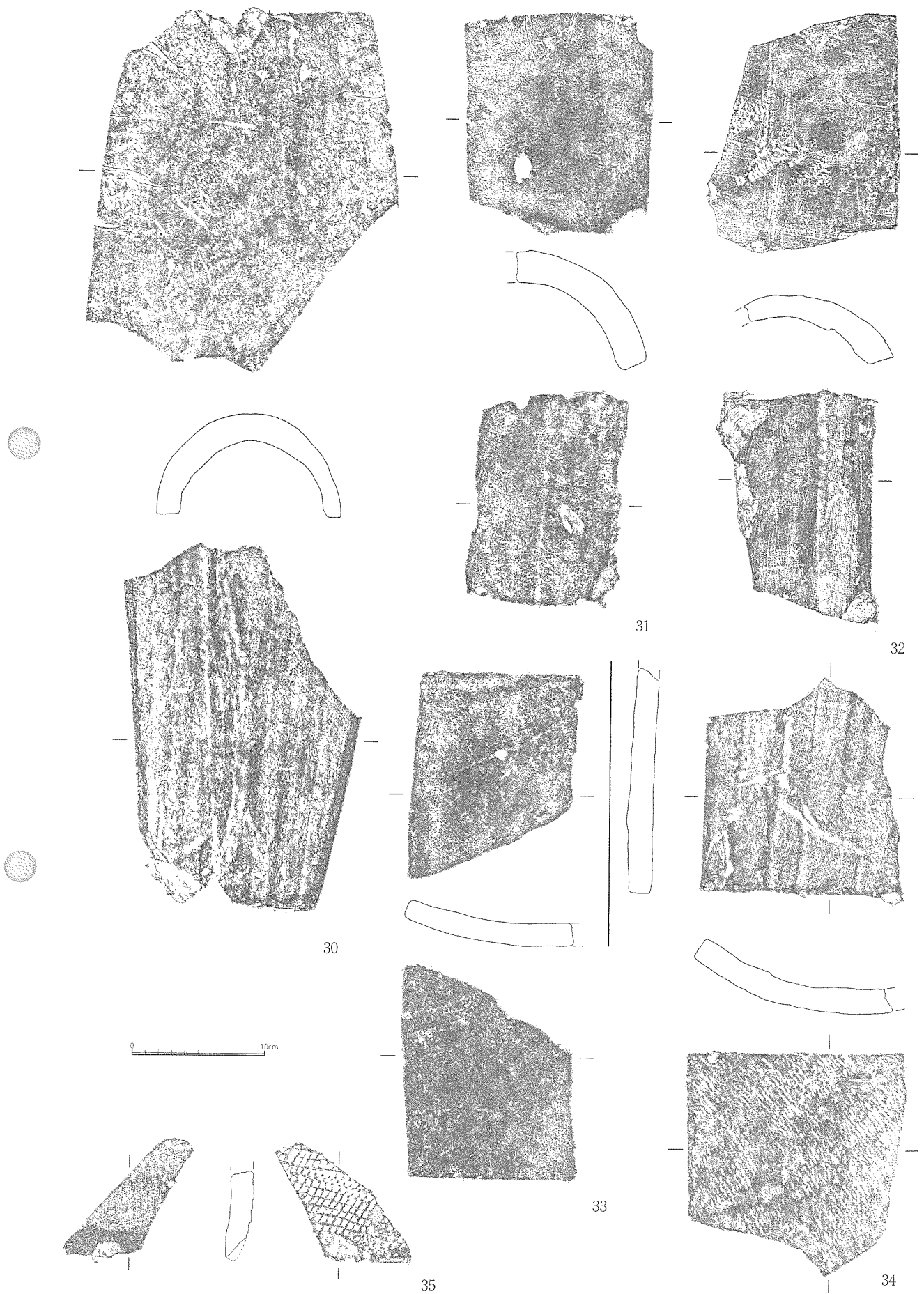


图10 出土遺物実測図 5

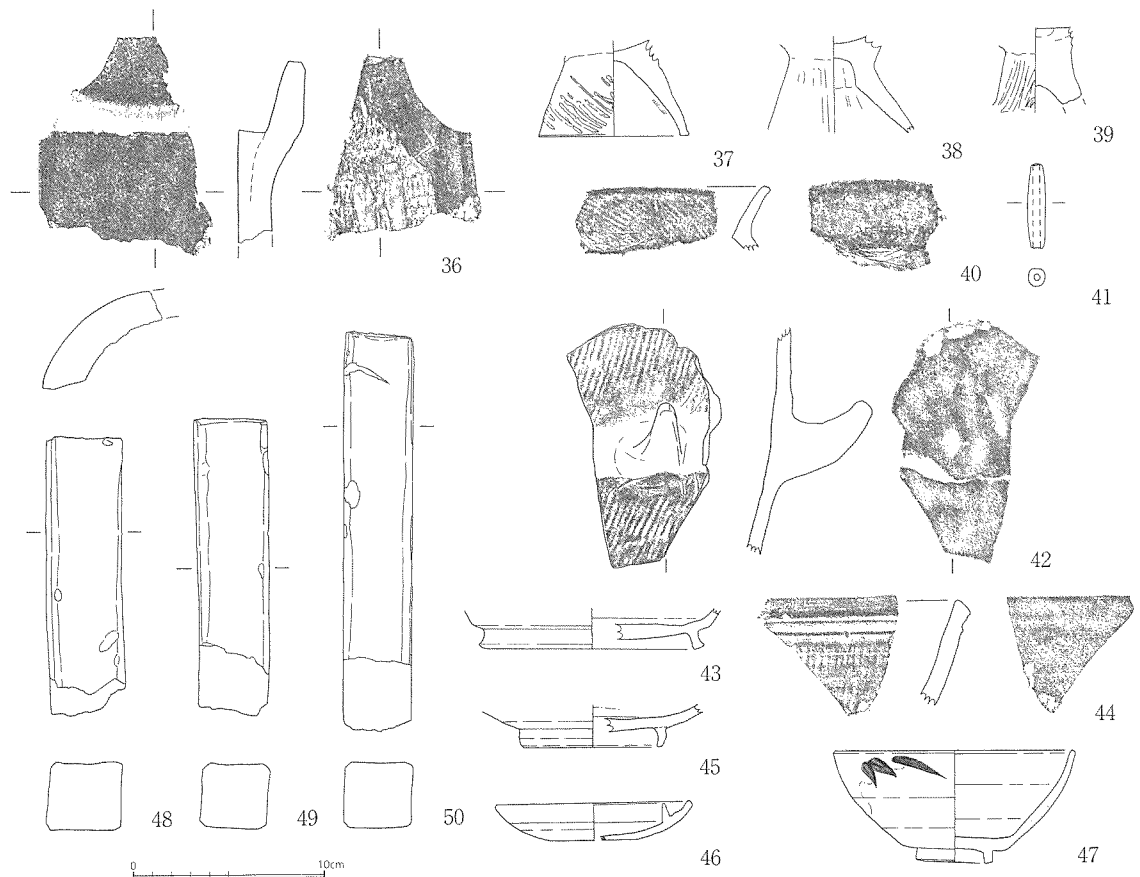


図11 出土遺物実測図 6



図12 近代以降の構築物（上が東）



図13 SK27（東から）



図14 SK24出土軒平瓦（実測図番号1）

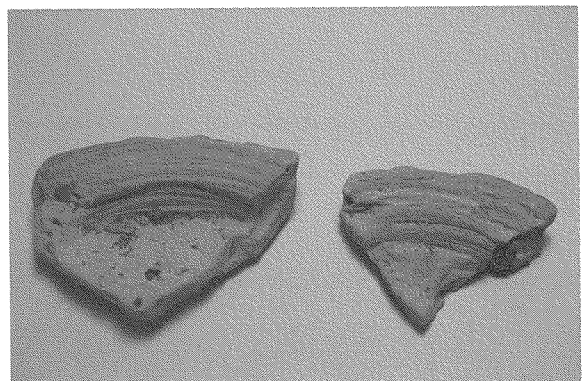


図15 SK24出土軒丸瓦（実測図番号2、3）

表2 遺物観察表

図No	出土遺構	種別・器種名	凸面	凹面	厚さ	胎土	焼成	色調		磨し	備考
								外面	断面		
1	SK24	軒平瓦	ナデ	布目	42mm	やや密	やや軟	淡黄	にぶい橙		顎長53mm、顎高19mm。凹面額部直上はヘラケズリ。瓦当文様は鑿伏押し挽き五重弧紋。桶巻作り
2	SK24	軒丸瓦			32mm	やや粗	やや軟	灰黄	灰白		外縁幅37mm、外縁高18mm。外縁は三重圓。外縁部より内側は剥離しており不明。裏面は摩滅しているため調整不詳。山田寺式
3	SK24	軒丸瓦			24mm	やや粗	やや軟	淡黄～黄灰	淡黄		外縁幅41mm、外縁高10mm。外縁は三重圓。外縁部より内側は剥離しており不明。裏面はナデ。山田寺式
4	SK24	不明			16mm	やや粗	やや軟	灰白～浅黄橙	灰白～浅黄橙		器形不明。横方向のナデ。
5	SK24	不明				やや粗	良好	灰白	灰白～灰	○	器形不明。一部横方向のケズリ
6	SK24 (SK22まじり)	丸瓦	横方向のケズリ	布目→ナデ	19mm	やや粗	良好	淡黄～灰白	灰白～にぶい黄橙		凸面凹面とも端部に面取り
7	SK24	丸瓦	縄タタキ→ナデ消し	布目	22mm	やや粗	良好	浅黄～灰白	浅黄～浅黄橙		凹面端部に面取り
8	SK24	丸瓦	平行タタキ→タタキ消し	布目	20mm	密	良好	灰白	灰白		凹面端部に面取り
9	SK24	平瓦	格子タタキ→ナデ消し	布目	24mm	密	良好	浅黄橙	浅黄橙～灰		凹面端部に面取り。桶巻作り
10	SK24	丸瓦		縄痕	17mm	粗	やや軟	灰白～灰	灰白	○	凸面摩滅のため調整不詳。凹面端部に面取り
11	SK24	丸瓦	横方向のケズリ	布目	26mm	やや粗	やや軟	淡黄～にぶい黄橙	淡黄～浅黄橙		凸面凹面ともに端部に面取り
12	SK24	丸瓦			20mm	やや粗	軟	淡黄～浅黄橙	灰白～浅黄橙		摩滅のため調整不詳
13	SK24 (SK22まじり)	丸瓦	横方向のナデ	布目・縄痕	32mm	やや粗	良好	黄灰～褐灰	灰白～褐灰	○	玉縁
14	SK24	丸瓦	縄タタキ→横方向のケズリ	布目	21mm	密	良好	灰白	灰白		凹面には布の縦じ合わせの痕跡。端面にハナレ砂
15	SK24	平瓦	平行タタキ	布目	25mm	やや密	良好	灰白～灰	灰白	○	凹面端部にケズリ
16	SK24	平瓦	ハナレ砂	布目→斜め方向のナデ	23mm	やや粗	良好	灰～暗灰	灰白～灰	○	
17	SK24	平瓦	横方向のケズリ	布目→斜め方向のナデ	18mm	やや粗	良好	灰白～淡黄	淡黄～浅黄橙		端部に面取り。桶巻作り
18	SK24	平瓦	蓮華紋	布目	18mm	やや粗	やや軟	浅黄橙	浅黄橙		
19	SK24	平瓦	縄タタキハナレ砂	平行タタキ→ナデ	25mm	やや粗	良好	灰白～灰	灰白～灰	○	凹面縄痕か。
20	SK24	平瓦	縄タタキハナレ砂	布目	26mm	やや粗	良好	灰白～灰	灰白～灰	○	凸面端部に沈線
21	SK24	平瓦	横方向のケズリ	布目→ナデ	20mm	やや粗	やや軟	灰白～浅黄橙	灰白～浅黄橙		凸面端部に面取り。桶巻作り
22	SK24	平瓦	横方向のケズリ	布目	22mm	やや粗	やや軟	灰白	灰白		凹面には布の縦じ合わせの痕跡。凸面端部にごく浅い沈線
23	SK24	平瓦	縄タタキ	布目・ヘラケズリ	27mm	緻密	良好	淡黄	淡黄		凸面端部に面取り。桶巻作り
24	SK24	平瓦	格子タタキ	布目	19mm	やや粗	良好	浅黄橙～橙	浅黄橙～橙		凹面には布の縦じ合わせの痕跡。凹面端部に面取り。桶巻作り
25	SK24	平瓦	格子タタキ	布目	44mm	緻密	軟	浅黄橙～淡黄	浅黄橙		端面・端部はヘラケズリ。桶巻作り
26	SK24	平瓦	格子タタキ	布目	27mm	やや粗	良好	灰黄	灰黄～黄灰		凸面の格子タタキは2種類。端部はヨコナデ。桶巻作り
27	SK24	平瓦	横方向のケズリ	布目	22mm	密	良好	灰黄	灰白		凸面凹面ともに端部に面取り。桶巻作り
28	SK 1	丸瓦	縄タタキ→ナデ	布目	21mm	密	良好	灰黄～灰黄褐	灰黄～にぶい黄橙		端部に面取り。
29	SK 1	平瓦	横方向のケズリ	布目・ヘラケズリ	22mm	やや粗	良好	灰白～灰	灰白		桶巻作り
30	SK 1	丸瓦		布目	23mm	密	やや軟	灰白	灰白		凸面摩滅のため調整不詳。凹面には布の縦じ合わせの痕跡。凹面端部に面取り
31	SK 1	丸瓦		布目	26mm	密	軟	浅黄橙	浅黄橙		凸面摩滅のため調整不詳
32	SK 1	丸瓦	縄タタキ→横方向のケズリ→ナデ	布目	24mm	密	良好	灰白	灰白～にぶい黄橙		凹面に面取り。
33	SK 1	平瓦	横方向のケズリ	布目	18mm	密	軟	灰白～浅黄橙	浅黄橙		桶巻作り
34	SK 1	平瓦	縄タタキ	布目	21mm	やや粗	やや軟	浅黄橙	灰白～浅黄橙		桶巻作り
35	P17	平瓦	格子タタキ	布目	18mm	やや粗	軟	浅黄橙	橙		凸面凹面ともに端部に面取り。桶巻作り
36	SK10	丸瓦	縦方向のケズリ	ナデ?	33mm	粗	良好	暗灰～黒	灰白～暗灰	○	玉縁
37	SK 1	台付甕				やや粗	良好	にぶい黄橙～灰白			内面ハケメ、外面条痕。弥生最末～古墳時代前期
38	SK 1	高坏または台付甕				粗	やや良好	橙			摩滅のため調整不詳。残存高5.2cm。時期不詳
39	SK22	高坏				やや粗	良好	浅黄橙			内面ナデ、外面ミガキ。穿孔の痕跡残る。弥生末から古墳時代前半
40	P11	土師器甕				やや粗	良好	にぶい黄橙～黒褐			内面ナデ、外面ハケ、口縁部ヨコナデ。時期不詳
41	検出中	土錘				密	良好	橙～灰白			全長4.5cm、最大系0.95cm、孔径3mm
42	SK24	須恵器甕				密	やや軟	灰白			外面タタキ。内面ナデ、指頭庄痕あり
43	SK 1	須恵器杯				密	良好	灰黄			内外面回転ナデ。底径12cm、残存高2.2cm
44	SK24	須恵器鉢				密	良好	灰			外面体部タタキ、口縁部・内面回転ナデ。
45	検出中	灰釉陶器皿				やや粗	良好	灰			回転ナデ、付高台、重ね焼き痕。低径7.8cm、残存高2.3cm。
46	SK 9	瀬戸美濃系陶器灯明皿				密	良好	暗茶褐色			口径10.6cm、高さ2cm、連房式登窯第10小期
47	SK 9	瀬戸美濃系陶器碗(陶胎染付)				粗	やや軟				体部はロクロナデ、底部は削り出し高台。口径13cm、高さ6.1cm。連房式登窯第10小期
48	SK 9	不明				やや粗	良好	灰白～浅黄橙	灰白～橙		残存長15cm、断面3.7cm×4cmの方形。四隅は面取りされる。被熱
49	攪乱中	不明				やや粗	良好	灰白～黄灰	浅黄橙～にぶい褐		残存長15.8cm、断面3.5cm×3.7cmの方形。四隅は面取りされる。被熱
50	SK17	不明				やや粗	良好	灰白～浅黄橙	浅黄橙～にぶい黄橙		残存長21.3cm、断面3.5cm×3.7cmの方形。四隅は面取りされる。被熱

VI 小結

出土遺物の大半を占めるのは瓦だまりから出土した古代瓦である。軒瓦は軒平1点、軒丸2点であった。軒丸瓦は瓦当面が剥離し文様は不明であるが、その他の特徴から山田寺式の瓦であると考えられる。今回全体のカウントをおこなっていないため、凸面の各調整の比率は出せていないが印象としては瓦はタタキ消しているものが多そうである。瓦は大きな破片が多く、廃棄後の二次的な移動はないとみられる。

本調査では、これまでの調査と同様、寺院に関わる遺構は確認されず、寺院に関わる遺構としては瓦だまりを検出したのみであった。また、寺院建立以前に遡ると考えられる遺構も今回は検出されず、近代以降の攪乱が多くみられた。その一方で遺物としては、ごく少量ではあるが弥生時代末から古墳時代初頭にかけての土器、尾張元興寺に関わると考えられる古代瓦や須恵器、近世の陶磁器類などが出土しており、現在は失われてしまっているが、それぞれの時期の遺構が存在していた可能性をうかがわせる。これらの遺物の傾向は、本調査では中世の遺物がほとんどみられないこと以外は、これまでの尾張元興寺跡で行われてきた調査の成果と同様なものである。中世の遺物がみられないのは、近世の開発や近代以降の攪乱等による影響が大きいと思われるが慎重な検討が必要である。近世以降に関しては泰雲寺や元興寺といった寺院や佐屋街道沿いの町屋などに関わる遺構・遺物であると考えられる。

今回の調査は非常に小規模なものであったが、その成果は中世が希薄というやや異なる部分はあるものの、全体としては尾張元興寺跡で確認されている傾向を追認するものであった。

報告書抄録

ふりがな	おわりがごうじあとだいじゅうさんじはくつちょうさほうこくしょ							
書名	尾張元興寺跡第13次発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	市澤泰峰							
編集機関	名古屋市見晴台考古資料館							
所在地	〒457-0026 名古屋市南区見晴町47 TEL: 052-823-3200 FAX: 052-823-3223							
発行機関	名古屋市教育委員会							
所在地	〒460-8508 名古屋市中区三の丸三丁目1番1号 TEL: 052-972-3268 FAX: 052-972-4178							
発行年月日	2009年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おわりがごうじ 尾張元興寺 跡	なごやしなか 名古屋市中区正木4 丁目1007番の一部	23100	市: 7-22 県: 7022	35° 08' 34"	136° 53' 50"	2008. 4. 7 ~ 2008. 5. 2	65㎡	倉庫建築工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
尾張元興寺跡	寺院跡	奈良~中世		瓦だまり		古代の瓦		第13次
要約	本調査地点ではこれまでおこなわれてきた調査同様伽藍に関わる遺構は検出されなかった。包含層も残されておらず、表土を除去するとすぐに地山であった。攪乱も多く、遺構も明確なものは多くはなかったが、瓦だまりを2ヶ所で確認した。また、近代以降の防空壕や地下の収納スペースと思われる構造物を検出した。出土した瓦は軒瓦は3点ほどであり、多くは平瓦や丸瓦の破片であった。大きな破片も含まれており、二次移動はないと考えられる。							

尾張元興寺跡第13次発掘調査報告書

2009年3月31日

編集 名古屋市見晴台考古資料館
 名古屋市南区見晴町47
 TEL: 052-823-3200 FAX: 052-823-3223

発行 名古屋市教育委員会
 名古屋市中区三の丸三丁目1番1号
 TEL: 052-972-3268 FAX: 052-972-4178

印刷 西濃印刷株式会社